



修学旅行を終えて

コロナ禍の中、3年生にとって中学校生活の思い出となる修学旅行の実施に向け、たくさんの方々にお世話をいただき、何とか実施にこぎ着けることができました。そして、感謝の思いを持ちながら、無事旅行を終えることができました。感染症拡大防止に向けいろいろとご準備をいただいた保護者の皆さま、お世話いただいた旅行会社の方々、関係者の皆さま、ほんとうにありがとうございました。

2日間に短縮されましたが、いろいろな人との出会いが心に残る修学旅行となりました。志摩観光ホテルでの昼食を食べながらのテーブルマナー講習会では、伊勢志摩サミットで各国首脳のワーキングディナーを担当した総料理長 樋口宏江さんから、「緊張されるとは思いますが、料理を楽しんでください。」というあいさつをいただき、ホテルマンによる一流のサービスを受けながら食事を楽しみました。講習会の講師を務めていただいた支配人の椿さんは、私たちと同じ津市出身ということで、名の通った老舗「シマカン」を少し身近に感じることができました。昼食に先立っての天白さんによる、世界に誇る日本の食文化についての話も、郷土に伝わる鯉節（波切節）を世界に発信しようとする意気込みや、その道を究める人の思いが伝わるものでした。

その日の夜に行われた鳥羽水族館の飼育員、内山さんの話も興味深く、後の質問コーナーでは、たくさんの方が質問が出されました。「仕事をする上で大切なことは、コミュニケーション。いろいろな役割を持った大勢の人が勤める職場では、まずは名前を覚えることが大切」、「私は幼稚園の頃から飼育員になると思っていました」「(コロナ禍の中) 普通が一番。普通に感謝」との言葉が印象的でした。講演会後にお聞きしたところ、水族館の飼育員になるには、例えば専門学校に通い資格を取るとか、海洋系の大学に進学する方法があるそうです。ただ、求人数が極めて少なく、鳥羽水族館で働きたいというより、全国の水族館の情報を集め、欠員を待つという状況だそうです。夢をあきらめずどこまで挑戦し続けることができるかにかかっているとも言えます。

学校祭、修学旅行と大きな行事を終え、3年生の皆さんにとって次は進路実現に向けたそれぞれの挑戦です。「雨だれ石を穿（うが）つ」、これからの3か月・4か月が勝負です。

読書の秋 読書週間（10/27～11/9）が始まっています

読書の秋、1・2年生の教室では、静けさの中、朝の読書とともに1日がスタートしています。毎年、10月27日から11月9日は読書週間です。

読書推進運動協議会によると、「読書週間」の源は、1924年（大正13年）。大量の出版物が消失した関東大震災からの復興期に、日本図書館協会が、全国で読書の鼓吹・図書文化の普及・良書の推薦などを目的とした行事を展開したことにあります。のちに「図書館週間」と名づけられたこの行事は、年中行事として定着しましたが、1939年（昭和14年）、太平洋戦争のさなか「一般週間廃止令」により、その幕を閉じることとなります。

その後、1947年（昭和22年）、終戦の2年後、まだ戦争の傷痕がいたるところに残っているとき、「読書の力によって、平和な文化国家を創ろう」と、出版社や取次会社、書店、公共図書館が力をあわせ、マスコミも加わって、11月17日から、第1回の「読書週間」が開催されました。その反響を受け、翌年の第2回からは、文化の日を中心にした2週間と定められ、この運動が全国に広がっていったそうです。



読書週間の背景に、関東大震災や戦争があったとは驚きです。活字離れ、読書離れが心配される中、電子メディアの発達によって、情報伝達の方法が大きく変化してきています。しかし、こうした時代だからこそ、私たちの心を豊かにする、「本」との出会いを大切にしたいと思います。本年度の読書週間の標語の入選作は「ラストページまで駆け抜けて」ですが、個人的には次点作「ページをめくる、私が変わる」の方が気になります。本との出会いに対するわくわく感が伝わってきます。

10月28日（水）の中日新聞の朝刊に関連した記事がありましたので、紹介します。

中日春秋

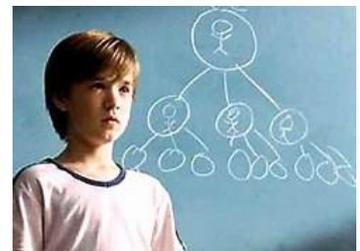
室町期の武将、太田道灌には古歌にまつわる知られた言い伝えがある。いくさの際に夜行く道を選ばなければならなくなつた。今は引き潮だからと、海辺の道を主君に進言し、味方を無事移動させたという▼「遠くになり近く鳴海の浜千鳥鳴く音に潮の満干をぞ知る」。鳥の声と潮のつながりを詠んだ古歌を知るがゆえの手柄と伝えられる。古きを知ることで道を間違えることはないという説話のようでもある▼古人の知恵が、よりいっそう重く感じられる、コロナ流行下の世の中ではないだろうか。この春以降、何冊か古い書物を手にして強く思う▼英国の作家デフォーが十八世紀に書いた『ペスト』には、感染症の流行下で、主人公の商人が仕事か命を守るための行動か、と悩む場面がある。第二波の恐ろしさも記されていて、まるで今日の世界のために書いているように思える。日本の古典では『徒然草』を開くと、世の中は虚言ばかりだと書かれている。フェイクニュースが相次ぐ今、道を間違えないための言葉のようにも読める▼読書週間が始まった。十一月一日は古典の日という。コロナ関連に限らず、読書で古きを知ることは道を間違えないための重要なすべであらう▼「すべて良き書物を読むことは、過去の最もすぐれた人々と会話をかわすようなものである」。デカルトのものという言葉も今年重く感じられる。 2020.10.28

パイ・フォワード

前号の「恩返し」という言葉から、数年前に小学校の卒業式で話したことを思い出しました。その時の話を少し要約してみます、...

「皆さんは「パイ・フォワード」という言葉を知っていますか。これは、2000年に製作された映画のタイトルです。映画の主人公は、アメリカのラスベガスに住むトレバーという少年です。

物語は、中学校に入学したトレバーと、社会科の先生との出会いから展開していきます。中学校に入って最初の社会科の授業で先生は、「世界を変える方法を考え、それを実行してみよう。」という課題を与えました。ほとんどの生徒は、いかにも子供らしいアイデアを提案しましたが、トレバーは違いました。彼の提案した考えは、「パイ・フォワード」というものでした。自分が受けた善意や親切を、その相手に返すのではなく、別の3人に渡すというものでした。「恩返し」ではなく「恩送り」というものです。人からもらった善意を、別の3人に渡していくことで善意の輪が広がり、自分が暮らすこの社会を、世界を変えることができると、トレバーは考えたのです。



トレバーは、これを実践するため、善意を渡す相手を探します。仕事に就かない薬物中毒の男の人、課題を出した社会科の先生本人、いじめられている同級生...

いろいろと試みましたが、なかなかうまくいかず、「パイ・フォワードは失敗だったのではないか」と思い始めました。しかし、トレバーの気づかないところで、次の人へと善意のバトンが渡され、最後は、、、といったストーリーです。

これは、映画の話であって、現実ではありません。しかし、実際に、小さな「パイ・フォワード」、「恩送り」が行われていることも事実です。皆さん一人一人が、「パイ・フォワード」、「恩送り」のスタートになることも可能です。皆さん一人一人の善意で、身近な社会を変えることも可能です。友達に意地悪をしてしまったり、仲間はずれにしまったり、そんな社会を変えることも可能なのです。

できることなら、自分が他の人からしてもらったら嬉しいなと思うことを、まず、人にしてあげてください。難しい言い方をすると「己の欲する所を人に施せ」ということです。反対に「己の欲せざる所は人に施す勿れ」ということわざもあります。「自分がして欲しくないと思うことは、他の人にすべきではない。」という意味ですが、皆さんには、より積極的な「己の欲する所を人に施せ」という生き方を実践してほしいと思います。自分の行いが、周りの人の幸せにつながるそんな生き方を目指してください、...」 というような内容です。皆さんと一緒に、善意でつながる学級、学年、学校そして地域づくりができるといいですね。

毎日のお知らせや、子どもたちの学校での様子をホームページに掲載していますのでご覧ください。 ホームページアドレス <http://ednet.res-edu.ed.jp/c-minamigaoka/>

